

(えびな九条の会会報——原稿)

二〇一一年五・三憲法集会に参加して考えたこと

えびな9条の会代表 下山房雄

「憲法改悪阻止各界連絡会議」「平和を実現するキリスト者ネット」などの護憲民主団体が実行委員会を作り、毎年五月三日に文化人・知識人の講演、音楽などのアトラクション、共社幹部の演説を内容とする憲法集会を日比谷公会堂で行い、さらに銀座デモを行う行事は、もう十年以上続けられてきた。「思想や政治的立場の違いを超えて」(集会アピール)の共同の護憲運動として貴重な場だ。会場周辺に日本共産党、新社会党宣伝カーが並ぶ珍しい風景、あたりで私が受け取った二一枚の多様なビラの内容、別々のリーダーをしかし五月一日には行ってきた「全労連」と「全労協」(最大ナショナルセンターの「連合」はリーダーを五月一日にはやらずデモもしない)の議長がともに集会資料に寄せたメッセージなどからも共同の質的広がりを実感出来る。

われわれ「えびな九条の会」は二〇〇七年、〇九年、一〇年、一一年と、今回で四回目の参加である。ただし〇七年は一五名だったのが、今回は二名（年齢合計は一五二歳！）。そこは少し残念だったが、集会の内容は今回も充実していて満足した。

「東日本大震災の被災者に心を寄せ 生かそう憲法 輝け九条」との今回集会タイトルにあるように、被災者支援は憲法一三条（個人の尊重）、二五条（生存権）の実現として行われるべきと各講演演説が強調した。かねがね住民の抵抗でできなかった巨大開発を一気にやる好機とされる危険への警告である。共産党の志位さんは、阪神淡路震災の折に「単なる復旧ではなく創造的復興を」との国や県のスローガンのもと超高層ビル、不採算空港が建てられ、生活感溢れる商店街、地場産業が消失させられたことを挙げつつ、今回震災への「復興構想会議」で菅首相が「復旧ではなく創造的復興」と全く同一文言を使ったのを聞き「ぞっとした」と述べた。演説のこの部分では満場どよめきであった。

朝日新聞記者の伊藤千尋さんは、訪れたアイスランド、コスタリカで地熱発電が盛んであり、かつその技術が火山国日本のものであること、日本でも地熱発電で原発二〇基分の電力生産が可能と指摘された。この指摘で私はつくづく考えてしまった。大量の国家資金が原発開発導入に延々と投ぜられながら、何故地熱発電の自国技術が外国で使われ、日本では実地に大展開されないのか。原発電力生産のゴミであるプル

トニウムが核爆弾の原料であることが、その因果の内奥にあるのではないのか。中曾根康弘が典型だが、原発導入に熱心に動いた政治家は殆ど熱烈な改憲論者である。彼らは九条改悪で核武装した日本を作ろうとしてきたのだ。既に共和国⇨北朝鮮の危険な保有プルトニウム五〇キロの一千倍を日本は保有している。危ない！ この道を許してはならない。原発ゼロにすることは、核兵器製造原料の生産をストップさせることになる。九条擁護の立場からも、原発廃止を実現せねばならない。

(国分南やまに平在住)